

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止

フ ク X ク E ム

せんぱいだけに、あたしのせむし  
みせちゃいます。。



初めましてやそうでない方もこんにちわ。雪路時愛（ゆきじしあ）です。  
んーちゃかむーむー同人誌第四弾目となったこの本を  
お手にとって頂きありがとうございます。  
今回けいおん本でふたなり描いちゃいました。  
どうしても入れたかったシチュエーションが多すぎて…でもどれも捨てれなくて  
結局たくさん詰め込んだじゃいました！

味燐ふーかちゃんの小説では漫画には登場しないキャラも出てきます！  
それに漫画と小説には秘密が隠されていたり…???  
漫画も小説も最後までお付き合い頂ければ幸いです。  
それではお楽しみくださいませ！

2010・08月 雪路時愛

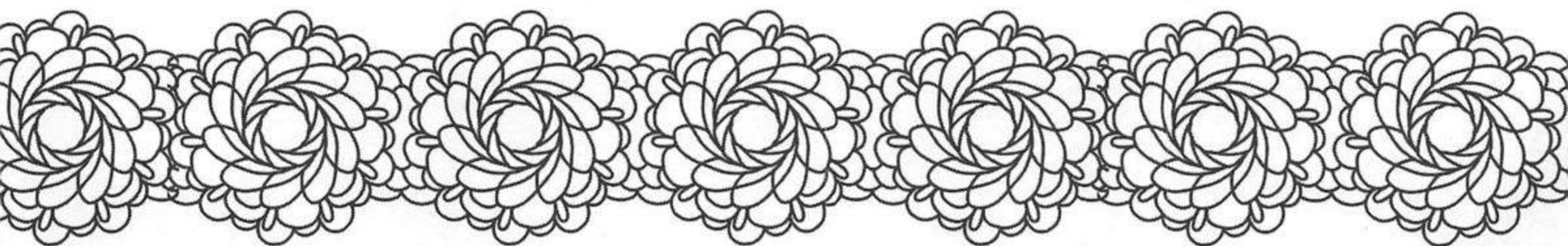
04 **マエガキ**

05-19 雪路時愛

20-24 味燐ふーか

25 **アトガキ**

26 奥付





せ、先輩…  
お話があるんですけど  
いいですか？

もじもじ



こ、こんなこと母にも  
言えなくて、滞先輩  
にしか相談できなくて…



うっ…

うっ



ん？  
どうしたんだ  
梓？

うん…  
今は私一人  
だと思っ

他の先輩達は…？  
いないですよ？



うわあーん…

だ、黙ってないで  
言ってみな？



私、頼りたさね  
るんだ…

しーん…



で、でもでも先輩にっ  
こんなこと言えないっ

うー……

ん？何だ？  
ふとももケガ  
したのかっ？

ふあっ…滞先輩の  
顔が…手が…  
近くに…

あ  
わ



あっ♡

ひんやりした手が  
気持ちいい…  
だからが敏感になっ  
てくる  
だめっ我慢…っ！…

ごっ  
ごめんっ

モジ

モジ



!?

あ♡あ♡♡

あ…そこおじゃなくて  
そのっ…あの…

あっ—あっだめっ—  
やあっ…—  
大きくなっちゃ—

最近なんだかおかしいな  
と思つてたらここまで  
大きくなつてしまつて…  
それに…すごく変な気持ち  
になつて…からだがあつたら  
そ、それで私どうしたら  
いいかわからなくて…

梓…これ、  
本物だよな？

こんなこともあるんだな…  
突然変異？いや、どうだろう…  
でもこんな恥ずかしい思いして  
まで梓が私を頼つてくれたんだ  
なんとかしてやりたいな

スカート…  
めくるよ？

自分…  
自分で…

滞先輩にコレ見られ  
ちゃうと思つたら  
また大きくなつて…  
スカートに隠れちゃう…

ごめん、あまりよく  
見えないよ  
もう少しあげて  
くれないか？

これ以上スカート  
上げるなんて

た、たぶんだけど、  
これちゃん…ちゃんだから  
落ち着かせてあげたら  
治ると思うんだ

梓がいいなら手伝つて  
あげると…  
嫌ならいいんだぞ？

落ちつかせる？

私澤先輩を  
信じてます!!

でも…  
どうしたら…

ふあ♡♡♡

あずさの可愛い♡  
包茎ちゃんぽだ

スカートをたくし  
あげておちんちん  
しごかれた感想は?

ふあ♡♡♡  
あめ♡♡♡

あ♡♡♡  
あ♡♡♡

つまり  
こうやって…

気持ちいいけど…  
恥ずかしいですっ

あ、また汁が  
溢れてきた…  
これをもつと  
出すんだ

これを…  
これをたくさん  
出すと治るん  
ですか?

たぶん…な

どうしたら  
この汁がたくさん  
出ると思う？

えと…この部分が  
凄く触られたら気持ち  
よくなって…

どうるどうる  
出てる感じが  
します…す

じゃあ汁がどれだけ  
出てるか確かめながら  
するよ

ふえっ？

からだ中に  
電気がはし…るっ…

すつぐきもちイイ…  
せんひゃい…もつとお…

あ…せんあ…  
きき…ん？

あたま…  
おかひく…なう

してえ…♡



先っぽおお：  
すごくすごくお：  
イイですつ：  
おく

舌が絡めくように  
動いて…  
もつと…もつとお

あーずーさあー  
こんなところで濡と  
何してんだあ？

ヒキッ

濡も…な



ハハハツ  
ハハハツ  
凶星かあ



わ、私は  
梓が  
いつものじゃ  
足りないので  
梓を犯つて  
んのか？



いい♡  
お汁たくさん  
でひゅ♡  
あつ...もつとたくさん  
でひゅ♡くるっ♡  
くるうっ♡♡

アハ♡梓、ちんちん  
ついてたんだなー  
ちくびさわると  
びくびく動くのな

はげしいっ...  
唇やわらかくて...  
包まれて...

ほら、濡もつと  
しやぶれつて  
あのこと言うぞ...?



す...すい...  
量だ...

あ...あ...あ...  
あ...あ...あ...

あ...あ...あ...

あ...あ...あ...

あ...あ...あ...  
あ...あ...あ...  
あ...あ...あ...

あ...あ...あ...  
あ...あ...あ...

ほら、  
滞

全部残さず  
飲めつて

私の白いお汁  
たくさん飲んでる

滞先輩が...

あ...あ...あ...

あ...あ...あ...

あ...あ...あ...  
あ...あ...あ...

全部…

カクカク

見ろよ梓  
梓の精子飲んで  
滞のあそこ  
ぐしよぐしよー

カクカク

もしかして梓のちんぽ  
しゃぶってた時から  
もうぐちよぬれだっ  
たんじゃね？

カクカク

カクカク

滞先輩の  
アソコ…

うわ…  
ほんとだ

みお…  
せんぱい…

ほら、梓のちんちん  
まだぴくぴくしてんじやん？  
滞の頑張りが足りないから  
じゃないのか？

いつもみたいな

やめ…

いつもみたいに  
私のデイルド  
しゃぶってる  
時の頑張りがさあ

先輩…そんなつ…





ちくび気持ちいい♡  
ちくび触るとおちんちんも  
ビクンってなつて...

ほら、ちくび  
いじるともつと  
でかくなるだろ？

すげっ  
二人供  
すごいよ



無理じゃないから

臆内で剥けて  
敏感になつてう♡  
腰がとまら  
ないツツ♡♡♡

これ挿れたら  
もつと大きく  
なるかな？



梓のおしり  
いただきい☆



本物のおちんちん  
欲しい欲しいって  
言ってたもんなあ

でも濡は  
こつちのが  
好き…だよな？

もつと  
かき回しちやえ



滞のアナル  
いつもよりしまり  
良くして押し戻され  
ちまうぜ...



それに梓の  
ちんちんと  
ゴリゴリ  
擦れる...







わかった！  
ちんぽのことは  
唯とムギには  
内緒にする

ただ

し！

滞は私の  
だかな！

あ

わかり  
ました…



一日

あずにゃん！  
おっはよー！

あ

ひあ！  
唯先輩に  
ムギ先輩っ

律先輩…  
あのこと内緒に  
してくれたかな…



昨日のことなら  
一部始終  
録画済みよ〜♪

ホホホ

人の心の中  
読まないで下さ…

んんん！

あずにゃん  
可愛いっ♡

「なあなあ、ちょっと気になることがあるんだけど」  
 「何だ、また何か企んでるんじゃないだろうな」

桜が丘高校軽音部は修学旅行を控えている為、放課後にミーティングと語っているお茶会を開いている所だ。何か企み事を考えているのはこの部員の田井中律。そして恐る恐る聞き入っているのは律の幼馴染でもある秋山澤だ。

「なあ、何か楽しいことあるの??」  
 「楽しいというよりは不思議な気分ですわね」

そして、同じように楽しそうな話題に興味深々な彼女は平沢唯。そして柔らかな口調で和ませているのが琴吹紬だ。ミーティングと言われているものだが、深い話をするわけでも無く、ただ『修学旅行でどんな事をしようか』と考えていた所である。

「最近、さわちゃんの様子が変じゃない?なんか朝からスゲー軽やかにしてるし、肌キレーだし」  
 「うーん、そいえばそうかも知れないよね、あつ、でも最近高めの化粧品使ってるとか聞いたけど」

「あ、そうだよな……で、でもさ、考えたんだけど!職員室に潜入して、さわちゃんの机からそのわけを探ってみようかなあと思っただけ」  
 「まあ、そんな事考える……馬鹿馬鹿しい……ムギもそう思わないか?……って」

「うわあ、楽しそうですわね。ワクワクしますわ」  
 澤は全員の馬鹿馬鹿しい考えに呆れを感じながら自分も少しそういうのいいかなと密かに思いながら全員の意見に飲まれていった。

ミーティングと言われた潜入会議が終わった後、『山中先生に頼まれて持ってくるように言われた』とカモフラージュをし、四人で潜入開始。

表の顔を重視とした清楚な机のレイアウトを見て笑いを止めるのに困難になりながら引き出しの一番下に何か茶色の遮光ビンに入った薬のようなものを発見しそれかと思った四人は持ち出す事にした。さわちゃんが席を外している時間だったので怪しまれる事無く成功した。(軽音部調べ)部室に戻った彼女達は円を描くように座り、律は例のビンを机の中心に置いた。

「よし、手に入れたぞ!!何々?何か書いてあるな……えーと『こちらの商品は健康食品です。朝の目覚めが最高に!!化粧品よりも劇的に変わります!!』だって」  
 「いわゆる、サプリメントみたいな薬なんだろうな、期待して損した」

「あれ、さわちゃんもぼろぼろ」  
 「ば……ばか。そんなのじゃない」

律は机に置かれた薬を手にして黙視をしてから企みを考えた様子でメンバーに向かって話しかけた。  
 「決めた!!この薬を修学旅行に持っていき、皆で寝る前に飲むんだよ、楽しそうじゃね?」

「ええ、っ!!りっちゃん頭イイねえ、楽しそう」  
 「そこは、否定すべきだろ!あ、もう」

二人の馬鹿な考えに落胆しつつ澤は渋々その意見を了解し、紬は口に手を当てながら笑っているだけで何も言わなかった。

— 修学旅行当日 —

京都見物をし関西弁で喋ってみたいり宿舎に戻ろうとしたが迷ってしまったのでさわちゃんに叱られたりしながらようやく宿舎で休憩という休憩が出来た。全員が布団が敷いてある部屋で枕投げをしたりして修学旅行を満喫していた。

「さ、就寝時間になりました。枕投げもいけれどあの薬の出番だ!えーとここらへんにあったんだけど……」

律は鞆の中を探りながら薬を探していると相変わらず心配する野次が飛び交う。薬を鞆の奥で見つけた律は全員に薬を自慢げに見せびらかした。

「じゃーん!例の薬持ってきた!」  
 「じゃあ、早速飲んでみよーよ。ラムネみたいなのかな?」  
 「へ、なんかタブレットみたいだよな?美味しそう、食べてみよ」と

「やっぱり、ラムネみたいだよね、お菓子。ねね、澤ちゃんもムギちゃんもぼろぼろ」  
 律は茶色の遮光ビンの蓋を取って取り出してみる5mm程度の紫色をした円形の薬を大量に口に運んだ。唯も何か菓子と間違えたように大量に口に運ぶ。

「美味しそうですわね、じゃあ一錠だけ」  
 律と唯は楽しげに話しながら、薬をに対して好奇心があるのにも関わらず澤は不安そうに薬を見つめている。

二人は何も不審もせず飲み始めた。  
 澤は不審を隠しきれずにじっとその現場を黙視しているばかりで手を出さずにいた。

「二人共、そんなに飲んで大丈夫なのか?私はいっ、こんな絶対効かないし何に効かかって全然分からないじゃないか」  
 「ふえ?ラムネじゃないの??」

「うーん、澤ってばそんなこと言っただけは好きなんですよ?」

「ほらほら私が飲ませてあげるさ」

律が薬を手にして滞りに口に迫り嫌がる滞りは必死に動き回り回避を続けた結果、二人の体が暴れた拍子に倒れてしまったその勢いで滞りの口に薬が入ってしまった滞りは飲み込んでしまった。

「はっ……り……りっのばかああ」

「悪りい……悪気は無かったんだよお……」

泣きながら訴える滞りを背に慰める事が出来ない律の姿が見え隠れする中、彼女達は一回就寝することにした。

\* \* \*

数分後、効き目が現れない彼女達は、退屈な中布団に入り笑いながら寝床を共にしていた。しかし、一向に効果が現れないのを待ちきれなくなった律は布団から飛び起き怒りを露にして頭を掻き繕っている。

「だあああつ！何で何もなんないんだよお！もつと劇的な変化つてのが欲しいのい」

「そんなに熱くなるなよ……どうせ見せ掛けの商品……つて」  
すると、滞の身体が何か変な違和感を覚えたようで、着ているパジャマを見渡し上半身を襟割りから覗いた。そこには先程には無かった爆乳の乳房があり、そして下半身を見るとクリトリスが膨張して男のチンポが生えたように変異していたのだ。

「はあ……どう……どういふことだ……体が変異している！まさかこの薬のせいで！皆より全然飲んでないのに……だから私は言ったんだ……」

「えーっ……すこーい。こんな効果があるなんて書いてなかったよね！つて、うわあああつ」

と、その後。滞以外の身体にも変異が現れる。唯は乳房とクリトリスが変異してしまい嬉がりつつ驚き、それから紬は少しふわふわした気分になったと話した。

「み……皆こんなに変異しているのに私だけ何も無いとか……はあ」

「あら？そんな事無いと思いますわ」

下半身に違和感を覚えた律はパンツを覗くとクリトリスがチンポのように変異しており、嬉しがりながら唯と手を繋いで話している傍ら滞りがまた不安そうに考え事をしている。

「おおっこれは……やったやっつた」

「ちよつと待て、どうやって戻るかわかっているのか？」

一瞬凍りついた空気が流れ、全員で対処法を考えるミーティングを開くことになる。「あれでもかこうでもか」と全員で考えた結果。全員で全身の弄りあいをする事に決定した。

\* \* \*

全員は円になって座り恥ずかしながらもパジャマを脱ぎ変異した全身を見せ合う。非常に恥ずかしい事だが仕方が無いと割り切っているが滞は恥ずかしがりな所もあり顔を伏せたまま変異した部分を露にしていた。

「んじゃ、始めようぜ……は……恥ずかしいって事はわかってる……だけど……やるしかない」

「そ……だよね……はあ、なんだか眠いような感じでフワフワしてる」

「へえそんなにフワフワしているのですか？」

紬はチラリと唯を見て身体に接触し巨乳になった乳房をさり気なく触り興味深そうに撫でている。そうすると唯の乳首が反応し始める。

「む……ムギちゃん？だめえ……なんか恥ずかしいよ」

「そうですか？でも」は反応しているわあ。唯ちゃん可愛い……勃っている所をクリクリしたら楽しそう」

「あつ、あん……今日のムギちゃんなんか違うよお」

紬の隣で律が滞に意地悪しているのを横目に見て紬は軽く笑いながら見届けた。

「ふふん。なんかスゲー事なってるよな。こんなにチンポ勃たせてさ……なんか変な汁まで出てる」

「そ……そんな事言うなよ……勝手にになったんだ」

「本当にそう？赤面しながら言っても意味が無いと思うんだけど」

「はっ……だから違うつて」

律は自分のチンポが大きくなっているのを感じたのか片手で触って遊びながら滞の乳房を触って、優しく愛撫をする。滞の乳首も勃起を始め彼女の赤面する顔が欲望に負けた顔に変化していく。

「おっぱいもこんなに大きくなって……大きくなりたいつて言つてたし丁度良かったじゃん、スリスリさせてえ」

律は滞の乳房の真ん中にチンポを挿んで擦り始める。上下に擦っていくと連れて大量の分泌液が滞の身体を汚していく。そのたびに滞の身体も先程よりも赤く変化していく。

「何考えて……つて勝手にやるなああつ」

「みおのおっぱいきもひい……ふわふわ時間だ」

「ちよつと……わたしの……はあああ」

「男の人のチンポってこんなに気持ちいいんだな……やべえ……なんか熱くなってきやがった……ああつ」

上下に擦っているうちに律は欲望に耐え切れなくなったチンポからザーメンを射精し、滞の顔に大量に白いザーメンがかかる。どうやら変異したチンポは形だけでは無く射精も出来

るようになっていたのだ。澤は律から出たザーメンを必死に泣きながら拭っていた。

「うあああつ……な……なんか白いのが出たぞ……」

「はあああ……ゴメン……あまりにも気持ちよくなって……私のチンポと一緒に擦ってみたらどうなるだろうな」

「そんなの……嫌だ」

「そんな赤い顔でチンポ勃たせているのによく言えるよ。欲しいって顔に書いてあるじゃん。それに戻れなかったらどうするんだよ。だからさ……しよっ、しよーよ」

「なんか騙されたみたいだけど……そこまで言うなら……」

律はありがとつと一言小さな声で澤に耳元で囁き。ザーメンがこびり付いた律のチンポを澤のチンポに近づけて対面座位になりながらお互いのチンポを弄っていく。

「はあつはああつ……澤のチンポ……ネチョネチョしてる。いやらしい汁まみれだな。こんなに気持ちよくなっているなんてやつは好きなんじゃん」

「はあああ……り……り」

お互いのチンポを流れ出す愛液で擦りあう。風船のように膨れ上がったそのチンポを見て恥ずかしさを覚えていた。

先端部分から亀頭にかけてお互いのチンポを優しく擦りあう。これが自分の身体なのかどうかわからないくらいの未知な性感を感じていた。

「うっやうっやうっしたら……スゲー気持ちよくなる……かもなあ」

律は澤のチンポの亀頭部分を撫でてそれからカリと言われる部分を激しく刺激する。

「うっ……ひやあああ」

澤は初めて感じる刺激に驚きを感じ、そして律の顔に耐え切れなくなったザーメンを射精した。

「澤……お互い様だな……へっ」

射精した澤は恥ずかしながら下を向いて頷いた。

と、それを見た紬は律の横からひよっこり現れ笑顔で現れた。紬は唯に何をしたのか、横たわった唯の身体は赤く火照りチンポはすでに勃起をし、何回か逝ったように痙攣していた。

「面白そうな事してますわね、唯ちゃんもほら」この通り」

「む……ムギ……唯に何したの？」

「うふふつ、唯ちゃん凄く感度がいいみたいです。面白そうな事してますし……お二人凄くラブラブですけど、今度は皆で楽しみましょ。」

「む……ムギ……ら……ラブラブって」

「ふふつ、唯ちゃん、うっちにごうぞ」

紬の後ろで横になっていた唯は痙攣した体を起こして、今にも疲れて寝てしまいそうな身体を露わにした。

「はあ……ムギちゃん……もうわたし限界だよお」

「まだまだダメよ、ほらチンポがまだ戻って無いわ。ささつ、今度は一緒に気持ちよくなりましょ。こんなこともあるうかと、用意してきましたの」

と、紬は私物の中から限りなくチンポに似せた出来の良い『ペニパン』だった。何事も無かったように腰に付けて不思議そうに彼女達は見つめながら触ったりもしている。

「な……なにコレ、スゲーよく出来てる……どうしたのこれ？」

「あんつ……ふふつ、限りなくリアルに作られたチンポですよ。このチンポ射精も出来るんですよ。そんな事はさておき……」

「……」

紬は唯の身体に近づき正常位の体位になり、唯のマン」

手を触れていく、それからアナルにかけてその液を潤滑剤の

ように塗っていく。

「唯ちゃんのマン」のほっも凄く赤くなって、唯ちゃんの液がこんなに……」

「あつ、ああんつ……む……ムギちゃんつ」

「マン」の液を付けてつと……じゃあ……いきますわね」

「えっ、ちよつとまって初めてなのにつ……こんな……」

唯のアナルを紬が触るたびに収縮していた穴が段々柔らかくなっていく、両穴から大量に流れ出ている潤滑剤代わりに使った愛液によって唯のアナルの締りは緩くなり挿入出来る状態になっていた。唯は初めて感じる感覚が気持ち良過ぎるのか泣きながら紬に身体を委ねていた。

「先程より緩くなっていますわ、大丈夫つ、ソレっ」

紬のチンポが唯のアナルに少しずつ挿入していく、初めての経験の為。穴から押し戻されそうになったが挿入する事が出来た。

「ああつ、だめえ。おかしくなるのお……あああつ」

「はあああ……ゆいちゃんの……凄くキツくて、温かいわあ」

「あつ……はあん……痛いっ……裂けちゃううっ」

「唯ちゃん、大丈夫？リラックスして……力抜かないと挿らないわ」

横でそれを見ていた律と澤は二人で目を合わせて鼓動が以前よりも高鳴っているのを感じた。そして感情を抑えきれなくなった律は澤を押し倒すように正常位にさせた。

「な……なんかさ。ムギ見てるとさ……ムラムラきちゃって……」

「り……律……実は私も」

「澤……ふふん、そーなんだ」

「ちよつ……そーなんだつてうっうっ」とだ」

律は澤に上から視線で意地悪をするように笑いながら言い。

その後緩やかに滞の身体に寄りかかった。

「細かい事言わずに……力抜いて……」

「っ……わかった」

律は滞の熱くなった愛液まみれのマンコに触れて人差し指を挿れていく、膣内の温かい感触が手に伝わっていく。上下に動かすと両方の愛液が溢れ出し、滞の表情を乱していく。

「ほ……本当に大丈夫なのか」

「大丈夫々安心して……じゃあ挿れるね」

律のチンポが滞の膣内へと挿入されていく、初めてで締りが良い膣はなかなか挿いってこれないので苦戦したが、ようやく奥まで挿いってくれた。

「リ……リっのがいっぱい挿いって……」

「滞のマンコ」のなか……スゲえ気持ちいい」

潤滑剤になる程に濡れている滞のマンコの中を上下に動かしていく。その度に滞は絶頂に近づいていく。

「あん……ああっ！だめえ……壊れるっ」

両隣で正常位になりながら。上下に激しく突いていく。部屋には四人の淫乱な声が響き、点呼が来るかも知れない事も忘れて、欲望に負けたチンポに夢中になっていた。

唯の横で滞が横たわり、二人の前で紬と律が隣で同じように身体で友情を確かめていた。

「お尻の穴にムギ……ちゃんのが……いっぱいになってえ、壊れちゃうっ……気持ちいいよお」

「はっ……ああっ、唯もそんなにっ気持ちいいんだな……私もきもちっ……いい」

唯と滞は軽くキスをして耐え切れなくなったチンポを擦りながら四人の身体は絶頂に達していた。

「ああっ、ダメですわ……チンポからなんか出そう……」

「ふああっ……私もまた出そうだ……ああっ」

「みんなあで出ちやおうっ……みんな大好きっ」

「ああっあああ！逝っちゃっ」

四人は抱き合いながら熱くなったチンポの先からザーメンを大量に射精し、お互いの顔や身体に放出しそのまま横たわった。

滞の膣口からはザーメンが溢れ出るくらいに射精され、唯のだらしなく広がったアナルには紬のザーメンが流れ出ていた。

\* \* \*

その後は全員が射精をしそのまま就寝し点呼が来るのを忘れる程に熟睡をしまし。さわちゃんに再び叱られながらも、起床した時には変異した身体は元に戻り、翌朝の目覚めは最高に良く寝坊する事無く(一部を除く)集合場所で全員が集まっていた。

「一体、あの薬何だったんだろうなあ……翌日の目覚めは良かったけど変異はするしさ」

「うんうん、りっちゃんそうだよねえ。私、今日歩けるか分からないよお」

唯と律が夢を見たかのように昨晚の事を話している中、滞が冷静になり紬のペニパンの件を思いたし、問い詰めていた。

「なあ……ムギ……こんなの聞くの何だけどもさ。あの薬ってさ……」

目を合わさず気まずそうに滞は紬に耳打ちで離しかけた。紬はキョトンとした表情で何事も無く笑顔で思い出したかのようになり事の始まりを話し出した。

「うふふ。あの薬ですか？アレはですね」

親の会社が裏で経営しているジョークグッズの会社の新製品

モニターを極秘で頼まれたものをさわちゃんの薬と摩り替えて置いていたものだった。怪しまれる事無く試してもらった

は丁度良いと考えたそうだが後から知らされた事実を三人

は驚きと共に紬の強さを思い知らされた一時になった。

「ムギ……恐るべし」

「ふふっ、さーて次はあの子にもモニターになって貰おうかしら」

紬の極秘悪戯はまだまだ続くようである。

—後輩達の様子は……—

「お姉ちゃんがいる軽音部のお留守番も、もう終わりなんだよねえ。なんか嬉しいようで楽しくないね」

「先輩達、帰ってくるんだよね。……部屋キレイになってたかなあ……ギターの手入れもしたいし、見に行ってみよつと」

ツインテールに低身長の彼女。軽音部の部長である中野梓は修学旅行中の先輩達に代わり、お留守番として部屋の管理を任せられている所だ。

最終日になっても気掛かりでギターを手入れをするという口実で部屋を見に行ってしまうのだった。頼まれ事は完璧にこなさないと済まない彼女の性格から見られるのであろう。

部屋へ着いてからは先輩達のガラクタを整理したり、テーブル等を綺麗に拭いたり、部屋に飾るために持ってきた花を生けていたりしていた。

「先輩達に任せていたら絶対こんな事もしませんからね。さて、ギターの手入れでもしようか……」

強気な口調で言いながら、ふとティーセットが置かれている戸棚を見るとアンティークな綺麗なガラスの小瓶に個別包装をされている砂糖菓子を見つけた。梓は興味本位でティーセットから小瓶を出して一粒その菓子を出して眺めた。

「綺麗なお菓子だなあ……先輩達のなのかなあ……でもこんな見たこと無いし」

人がいないか辺りを何回も見直してから梓はその菓子を制服のポケットに入れた。

「先輩たちもいつもケーキ食べたりしているし誰も見てないし、後で食べようかな？」

その時、彼女はこれから起こる突然変異の事を知らずに先輩達の帰りを待ちながら残りの時間を過ごすのであった。

この話はまた今度の機会に……。

了

# アートガキ。

どーもどーぞ、時愛です。

今回のけいおん本は如何だったでしょうか？

やりたい、描きたい事を詰め込んだので内容の薄いものになってしまいましたが、違う意味での濃い感じ  
な本になったと思います！え？どういう意味って！？ 読んだらわかるはずです！

ほんといろいろ詰め込んでましたー……後悔はしてませんっ！

商業も平行しての作業だったので忙しくて間に合うか心配でした……。

一人でもくもくと原稿やってました。うる星や○らを見ながら……

やっぱりふ○なりは良いですね～。

次の本もふ○なりになるかも……？

何故あずにゃんが突然変異したのかの理由は味燐ふーかちゃんの小説にヒントが隠されています。

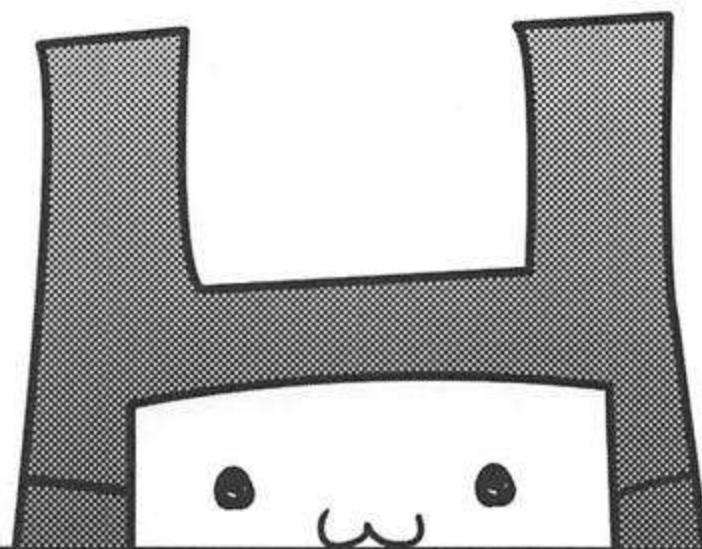
んー……やっぱり文章は苦手です……(つω< )

次の本もお付き合い頂けたら嬉しい限りです♪

それでは、またお会い出来る日まで～

2010・08月 雪路時愛 (ゆきじしあ)

<http://ncyakmmu.x.fc2.com/>



けいおん!!ふたなり本をお手に取って頂きありがとうございます。

原稿が間に合うかどうか冷や汗が出ながら執筆していましたが、無事入稿出来たので一安心です。:-)

アニメ版けいおん!!での修学旅行話のボリュームに満足している、味燐ふーかです。

さて、今回の小説のテーマは修学旅行先でちょっと軽音部のメンバーを覗き見している感じで書いてみました。

アニメのほうでは原作に無い展開もあったりして楽しかったですが、こういう形も楽しいかなと

そんな思いで書いてみました。

全員で！がテーマに入れていたのにも関わらず結果、律と漑に寄りになってしまいました。(おい)

軽音部のメンバーが会話している文を書いている時は漫才をしているようにテンポ良く書けるので楽しいですね。

私的に漑と唯は受身なイメージで律はそのまんまのイメージでむぎちゃんは大人しく見えて影の支配者(?)

みたいな感じだと思っています(笑)

今回のもう1つのテーマでもある『突然変異』とタイトルの『Another Day』ですが元ネタなあのミュージシャンの  
影響で名づけてしまいました。

けいおん!の登場人物を見て速攻反応してしまったのは病気ですね(知らない方は調べてみて下さい【えっ】)

今回の作品も相方の時愛ちゃん作品とリンクしているストーリーに勝手になってしまい驚いてしまいました。

何の予定も無くリンクしている作品になったので両者共に驚いていました。

ループしながら読める作品になっているので1冊で2倍3倍も楽しい本に仕上がっている本だと思います。

さて、お留守番をしていたあずにゃんの続きはもう1回最初のページに戻ってチェックですよ～。

良ければ何回も見ていただけたら幸いです:-)

ではでは～。

2010年 8月15日 味燐ふーか (宇宙再熱ちゅう)【[http://blog.livedoor.jp/sora\\_san3/](http://blog.livedoor.jp/sora_san3/)】



# 奥付

■ FAXMAIL ■

発行日:2010.08.15

イベント:ComicMarket78

発行:んーちゃかむーむー

著者:雪路時愛&味燐ふーか

HP:<http://ncyakmmu.x.fc2.com/>

Mail:[n\\_cyak\\_mm@yahoo.co.jp](mailto:n_cyak_mm@yahoo.co.jp)

印刷所:大陽出版様



## 18歳未満閲覧禁止

本作品の登場人物は全て20歳以上です。

画像の転載、データ化、web等でのデータの共有はご容赦ください。26



**K-ON!!** fanbook  
'n'-cyak-m-mu-  
PRESENTS

2010.08.15